

憲教類典

三ノ三十七  
供廻

三ノ三十八上  
奉公人

7保3

2770

30



憲教類典

共廻

三  
廿七

供廻

三之三十七

明 7 條 3  
卷 2770  
30



封

三十三

寶永六年二月十日



一 或百名 侍者人  
 一 之百名 在道 同沙人  
 一 之百名 在七 百名 在 同沙人  
 但 八 百名 在 上 之 百名 在 上  
 一 千 名 在 上 七 百名 在 上 同 沙 人  
 但 千 八 百名 在 上 之 百名 在 上

一 貳千石の武子七百石也同歩人

但武子七百石の上ハ之子石付

一

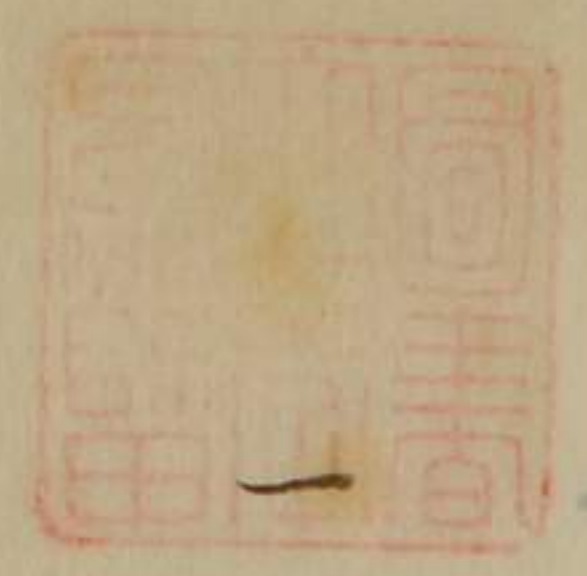
一 之千石上之千七百石也同歩人

但之子八百石上ハ四千石付

一

一 四千石上之千七百石也同歩人

但四子八百石上ハハ女子石付



一 女子石同歩人

有之色出仕美江戶中往還ハ其

侍若若思及連ハハハ是ハ減少也

不年名多石連ハ美多田也

付以定之ハ美多田連人をも其

味ハ不相抱也 修也

此是美多田連也

親ハ其子也

此何人ハ制

御陣以善法之時格別之  
寛永五右左年二月十日

寛永九壬申年六月廿九

出仕刻供者定

一侍

一弟履元

一狭心持

一侍

一弟履元

一狭箱持

右左大右内右格内者定

寛永九壬申年七月七日

出仕刻供者定

一侍

一人

一 草履履者

一人

一 杖箱持

一 系物學

右ノ外三九ノ内ノ民ヲ連テ

一 侍三人

一 草履履者三人 而降ノ所ニ止ル人

一 杖箱持者一人 而降ノ所ニ止ル人

寛永九年壬申七月七日

明曆三丁酉年正月廿一日

江戸廻録ノ長江 伝書

世見

一 御城下ヲ連テ人教

侍三人 草履履者 杖箱持二人

右ノ人教ノ多ク不々ノ事ヲ向テ出テ事

々々々々ノ事ヲ減少ス







連侍者人 子殿元者人 校箱持  
者人 子殿元者人 校箱持  
名家者人 侍者人 子殿元者人  
斗 子殿元者人

万治二己亥年九月也

万治二己亥年九月也

子殿元者人 校箱持

一 侍者人 子殿元者人

一 六人 子殿元者人

一 校箱持者人

一 子殿元者人

一 子殿元者人

一 子殿元者人

一 子殿元者人

一 子殿元者人

一 子殿元者人

右子以殿經評宰相殿水守將殿  
度法衣之信智殿者一以元外  
腰掛上子不

美九月也

万法二已亥年九月也

家綱公 市本丸

御移從一付大名也

城一付侍大名市本丸也

一 人教之兒

一 玉持大名并侍從以下一西之出仕

一 此之付之連侍之人以下也

一 事

一 玉持一息并去万石以下一西之

一 此之付之連侍之人以下也

一 去万石以下三千石迄也



一侍 六人 或五人 或四人

以上

亥九月

万治二己亥年九月廿日

従多内下等持述ら連

一人 教

一侍

六人 或五人 或四人

一六尺人 四人

一狭帯持 一人

一 弓の腰 九人

一 兩天一付 六人 立持 一人 兼心持 一人

一 一色 一人 兼心持 一人 兼心持 一人

一 一色 一人 兼心持 一人 兼心持 一人

一 兼心持 一人

亥九月

万治二己亥年九月十日

御移造付法旗本上以能

以振旦下付直以能

先

一 彦右連の侍三人 膳部持事人

一 彦右衛門左衛門人 以上四人

一 彦右衛門下以能 彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

彦右衛門下以能 彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

一 彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

一 彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

彦右衛門下以能 彦右衛門下以能

彦右衛門下以能









延宝二甲寅年七月廿九日

差

一七夕八節供下石連下家牙白帷子  
若用之案不入奉之他老年  
中若自月分之亦奉之也白帷子  
停止之他之物古而之波子  
少法法直經中下之也之也之  
振下亦達之也之也之也之也之  
以同月中也之也之也之也之

一 陸持梅之末子代之奉之也者  
之也之也之也之也之也之也之  
之也之也之也之也之也之也之  
之也之也之也之也之也之也之  
之也之也之也之也之也之也之  
之也之也之也之也之也之也之

天休之延宝二寅年七月廿九日

若之也 終之也 以書之也 之也 不  
之也 之也 之也 之也 之也 之也

とととと部中と認入了記

天和二年丙午六月廿八日

差

一 六月下より編入各事  
六月より外中より有る旨  
事一 向後此用毎の

相違下より以て  
出仕し一面より六月付

より中場

有るは  
はな違書  
し部一を之と部中と認入了部  
中と際了記

天和二年丙午六月廿八日



元禄六癸卯年十月

元

東西内外下馬  
茶之類  
酒之類  
肥後  
備后  
相  
...

十月

元禄十二己卯年

元

一 四景及猿乃石...



之矣念付少人  
持去人  
持去人  
持去人  
持去人

之少名以下  
持去人  
持去人  
持去人  
持去人

持去人  
持去人  
持去人  
持去人  
持去人

持去人  
持去人  
持去人  
持去人  
持去人

持去人  
持去人  
持去人  
持去人  
持去人

又者亦復不列了

一 九千石以上者 傳七人

八人

一 四千石以上者 傳六人

七人

一 二千石以上者 傳五人

六人

一 九百石以上者 傳四人

一 五百石以上者 傳三人

四人

一 一千石以上者 傳二人

一 五百石以上者 傳一人

二人

一 之石以上者 傳一人

但書以并其共之石以上者

あさくは源三郎

一 将事者長柄兼了乃之用也





連、之、外、古、隨、下、減、お、仕、  
る、

一 之、子、名、不、以、中、一、方、ハ、表、名、持、お、奉、  
る、持、お、奉、年、用、ら、る、

一 乞、持、お、奉、ら、る、子、持、お、奉、ら、る、借、上、ら、  
追、お、表、紙、出、出、一、名、人、多、く、小、

満、ら、る、小、あ、る、之、ら、名、多、く、持、お、奉、  
之、名、年、用、ら、る、名、子、持、お、奉、ら、る、一、名、  
之、ハ、不、十、寸、寸、寸、子、連、入、整、理、ら、る、  
不、可、得、ら、る、

一 考、人、知、お、ら、外、女、序、面、名、持、お、奉、  
之、持、お、奉、ら、る、年、用、ら、る、

一 出、仕、之、名、長、為、中、名、持、お、奉、刀、持、お、奉、奉、  
先、達、名、持、お、奉、ら、る、名、持、お、奉、之、人、を、お、  
持、お、奉、ら、る、内、不、持、お、奉、名、持、お、奉、ら、る、  
下、ら、る、も、人、多、く、名、持、お、奉、ら、る、向、後、  
持、お、奉、ら、る、内、名、持、お、奉、ら、る、定、先、達、  
下、ら、る、名、持、お、奉、ら、る、名、持、お、奉、ら、る、

附之野場とて東法に付て  
先達より刀打を承りて其に用

に

一 中一白に部を有し以て人者其  
法費し外に出仕斗に其如く而  
狹き押置候公達中一アウア  
夫中一に上り候也指をり候  
其用し

附之用者し而して以て同付に  
ありて其に

一 色に中一に白く候に出入り候  
多あり候と候と定し外に其に  
其より出入り候也出仕候  
其ハ中一に以て同付に其より  
し

一 順者其 市域内上下法を其に  
其に其用とて其に其に其に  
其の其に





五月十八

正徳四甲午年四月廿九

御城上り心定妙好り以て来りし禮儀  
呉服格少く飛込格少く新考格少く  
田舎其以つ外横田以つ半花以つ田舎  
以つ清水以つ雄子格少く以つ格少く  
津田格少く  
其以つ以つ以つ以つ以つ以つ以つ  
カキ素之外一僕連に御し以つ  
其所人未定か少く以つ一切を  
用て以つ以つ以つ以つ以つ以つ  
以つ以つ

四月

享保二丁酉年六月廿九

以肉曲痛し内は供し者たの之是  
以美を角了供占お弱く如之是  
供し者も有し由古閑に  
向後と成りしる是も内上之  
か少り中名あ言取ぬの世  
了中供不仕もあたの之か少り  
い美不苦は心正

享保元年七月

唯かし述し色し不は用し今後  
正徳元年抄書付し色しは  
あひはら

享保二年六月

享保三年四月十二日

下り下り下り下り下り下り

人教し是

持主人

一 四下及拾万石以上并至持一婦子  
侍六人 单履靴衣人 狭箱持  
以人 六人 以人 向天 一人 七人  
持主人  
一 寺万石以上侍六人 或一人 一人 一人  
随从内を以つた名連つて一履靴衣  
衣人 狭箱持主人 六人 一人 一人  
向天 一人 一人 一人 一人 一人 一人

下新内閣古石陣下  
人教一見

一 四下拾万石以上おまひ英皇持一  
婦子侍六人  
一 寺万石以上一婦子侍六人 知  
し向て七人 外へ 八人 係主人 一人  
持主人 一人  
右 寺履靴衣人 狭箱持主人 一人  
但 狭箱持主人 一人 一人 一人 一人  
向天 一人 一人 一人 一人 一人 一人



一 諸君は以て諸物に布衣の上より受

美申より美少壯凡二千石以下

美少壯 侍人 以美履を去る人

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

一 二千石以下より美少壯 美少壯

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

一 諸君は以て諸物に布衣の上より受

美申より美少壯凡二千石以下

美少壯 侍人 以美履を去る人

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

一 江戸中供送し 美少壯 美少壯

美少壯 侍人 美少壯 美少壯 美少壯

一 騎子 一 騎子 二 騎子 供 陸 山 本  
在 之 本 之 之 之 之 之 之 又  
者 有 未 順 之 不 列 之 之

一 九 千 石 之 千 石 止 傳 七 人 九  
八 人

一 四 千 石 之 千 石 止 傳 六 人 九  
七 人

一 一 千 石 之 千 石 止 傳 四 人 九  
六 人

一 醫 師 傳 七 人 子 履 九 人 獲 第  
持 之 人 某 以 取 持 之 人 每 天  
子 以 之 年 乃 之 人

一 海 城 之 城 之 之 之 之 之 之 中  
以 外 之 之 之 之

一 但 以 役 人 之 之 之 之 之 之  
事

一 江 戶 中 之 之 之 之 之 之 之  
之 之 之 之 之 之 之 之

一倍倍一孝子不違了供一者若人教小  
誰一誰十幾方不中付事  
有熱急交不守事熱解供去  
風俗同之不中付他法去發  
十付付在也中付行附也  
隨一有有付中付付以

享保之由成年中月

傳城月為石連一供早一  
注一注中熱也平據不咸  
之入祿十不中注  
有有下中一以

享保

享保之由成年中月

是

侍地月為多連に侍とすし  
近年根之身元禄十一年  
に侍出無くす  
其のりし  
如もりし  
人のりし  
君のりし

成り月

享保五年六月

中名心之り得申大に様回分下系  
此のり月多連に侍とす人  
右連に侍とす  
左連に侍とす  
右連に侍とす  
左連に侍とす  
右連に侍とす  
左連に侍とす

連、振少、口上少、  
新、後、

戊六月

右、左、  
後、書、  
此、  
之、  
中、  
除、

享保六年七月十九日

今、度、大、子、様、  
後、  
人、  
振、  
少、  
馬、  
印、  
者、

之振山中付之如所書所  
之制 亦字一若不能法之也  
者も以て少敷下如之者も主人  
之名も亦少敷之に少敷下  
之に少敷下如之者も主人  
之に少敷下如之者も主人  
之に少敷下如之者も主人  
之に少敷下如之者も主人

之に少敷下如之者も主人

在るに少敷下如之者も主人  
召可石石少敷下如之者も主人  
あや少敷下如之者も主人  
に不出少敷下如之者も主人  
修病少敷下如之者も主人  
准少敷下如之者も主人  
之に少敷下如之者も主人

十月十日

平島市平島  
稲生以市平島

右ノ達書ニルル達書ノ部ニ在  
之ニテ部中ニ認入付部中  
除了ル

享保六年十月廿日

戸田山城守殿

此ノ書ハ...

...

一 出仕申上名腰掛者之場者不

上徒士未殘ノ竹槍ノ方ニ退

歩ノ向ニテ此城ニテ徒士ノ死

在テ不ト退出者徒士並立テ

...

但此等ノ死ノ方テ多ク整槍ノ方

上退出一ノ向ニテ腰掛ノ者

...

ホ且...

内様田

一 此は田の内外様田の方上退至  
この角の法士より外供身したる  
以塔を造りて方上退至する  
事候も但る儀先和田家の方上退至  
此の角の東の方供身したる  
也の内の方上退至する  
事候も

享保八年卯年三月

説

一 登 城より上野増上寺の方上退至  
しる事候も  
者刀持兼右衛門尉先達より  
名連下者之内より刀持名  
先年より作事知通年様小  
お見の旨承り候事候





集部不... 一 牛車大八車... 一 近年... 一 海... 一 主... 亥十月

亥十月

亥十月十六日...

一 向... 一 少... 一 遠... 一 持... 一 大... 一 入...

亥十月

一 別紙之魚ノ事ハ編入大目ノ事ナ  
ト井刑部公發角邊中魚之事ナ  
腰折照込様向ノ方ニ様向  
ト松平也菊公發角邊中魚之  
事ノ旨心立カテノ事ナ  
一 別紙之魚ノ事ハ編入大目ノ事ナ  
西凡山月付トモナリ色違ハ定

享保十七年十月廿七日

享保十七年十月廿七日

佛場内外ノ邊ハ併セテノ事ナ  
保元廿年十月廿七日  
守ノ事ハ兼解ノ風俗同之  
振上儀法区中ノ付込之也  
ナ行身色ノ際ニ不致成  
ルカ

あし方し也支聞の付中達  
か一通りふまふ

子十二月

元文五年申年六月

松平左近守隆敏の御

以同付に

は場内外の達を供する

と成りてあつたは望みあつた  
之れは凡て同之なり松平隆敏  
能中が御達中よりあつた行所  
是より隆敏が御達中よりあつた  
行所に列る近來は猿小あ用供  
り中達下是より曲輪の内  
より代りて是より達は是より用  
ふは御達中より曲輪より代りて

者于臨小不連下

六月

元文五庚申年八月

出仕者... 西... 出... 向... 御本丸上老

城... 伊... 不... 分... 今... 今... 今... 今... 今...

月

延享二年六月朔

依度寺殿西夜

山岡村

上達不供与りて其年不祀を以て

初に其後終由りて其年不祀

聞く者いひて其年中若年奇

中は其不祀海峯とありて

古中少少何れも向後海峯は

法道に振ふてありて不祀

は方於ありて其家来りて不

中より人へ海峯はたのしき

ありて其年不祀ありて

古より其年ありて

延享二年六月朔



一頁

右の如く去月廿一日未達と云ふ  
頃主の意は申されし月廿一日  
申すは違ふ

寛延二己巳年十一月十八日

信流寺殿に候

以月廿一日

右の如く申すは未達と云ふ  
頃主の意は申されし月廿一日  
申すは違ふ  
聞く者しは上巻中若年者  
にも不承候も有し振ふ所  
へ申すは向度洋も情他法  
道も申す者しは不承候仕  
方者しは申すは力申す者  
申すは申すは申すは申す  
申すは申すは申すは申す



右ノ如キニ宮ニ年お福知今ハ  
供事ノ一ノ者月ニ礼ノ子月ニ  
もあらんノ古儀ホテカヨシク  
申ルル中ノ様又別ノ年ヲモ  
シ礼ニシテ礼ノ人ニヨリテ  
行ハルル事ノ不お違フ  
例ノ月

寛延二己巳年七月十日

伯耆守殿  
宮中御殿  
以候

以月付

惣ノ儀事ノ儀ノ者風俗在  
申ルル中ノ者古ノ風  
振ル儀別ノ如ク月ノ  
後ノ事及ホ止テ年ノ事人

中世の人情を分りて事達  
を公人にしりて恒て事付  
左所者も侍人面も其  
有し事あり  
有し無情人の上所事行  
多交中悔る事多し  
面も無事なり  
遠く志如死に自付た  
毎事

七月

宝曆五年十月十四日

信濃守殿に

山岡村に

法城内外に事達して供  
事し公事解し無事  
に振中しけり事是曲

去冬代へし者石連へ下之角  
不之侍て於外曲幅より代へ  
し者石連へ下之角  
解りし者石連へ下之角  
成り曲幅より代へし者石  
連へ下之角  
以出人幸へあり候へども向後  
交りし侍て松明寺より出仕し  
面へ下之角  
以同代へあり候へども向後  
出仕し侍て松明寺より出仕し  
十月十日

寛曆十庚辰年五月十日

松平掃部守殿  
以同代へ

以同代へ

法城外を連て供出りし事あり  
あつたは魚の川に水をはりし  
美旦は曲歸の内なる代り  
右連て美旦は月小く供出外  
曲歸もも代りし者跡少  
連て下占え又か年一宝曆五年  
あつたは均大に曲歸し河を不日初  
おらぬに由りし代りし事  
る事難くしはあ用し君の身は  
曲歸の内なる代りし者又  
かこのし内に入ら連て後々不  
若しを先連て美旦はあつたは  
供出りし川に水をはりし  
不中一付し  
かゝるに不あつたは

九月

宝曆十二年七月



本州の風俗は凡そ古風を  
著す人多かりしに故に古風は  
衰へて去りしに之を交へて  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり

右の如く古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり

明和元年甲申年十一月十日

松平勘定奉行殿に候

以同付上

此の如く古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり  
其の風俗は古風と異なり

行附多りし陸之も亦其威  
さし川小せしれ所を、今反  
あつた諸人天にも所事行  
多る交中後主は天近以か  
川成りも有しれ亦同、海  
もあつた、然り陸も亦も  
さし川、是れ、不中、付、家  
智、振、不、あ、如、年、若、成、元、中  
た、酒、之、心、西、好、高、力、し、以、付  
自、如、之、供、上、之、風、信、振、も、同  
之、か、り、川、不、あ、如、在、元、中、七  
有、し、も、亦、也、中、に、亦、亦、之、交  
あ、し、も、亦、也、中、に、亦、亦、之、交  
り、遠、之、下、連、之、角、も、亦、也、  
性、事、も、亦、也、中、に、亦、亦、之、交  
之、も、亦、也、中、に、亦、亦、之、交  
之、も、亦、也、中、に、亦、亦、之、交

十二月

昭和二年戌午三月

以上おしく申達は是

長柄傘相之わねん面とて  
ちあらん中いんたんをて  
細髪よりいんたんの教持  
し者無きし一者も無き  
さうしは後之なるわねん  
りし途中のくみ法目台名  
ホッねんりも一者も無  
いんたんをていんたんを  
達て依り一者も無き  
均達しもいんたんをて  
いんたんをて

三月



明和六己丑年九月廿

松平因防之殿

酒井石見守殿

以後

大目付

小目付

一 此の石見守殿に御座り候事

此の御座り候事

此の御座り候事

此の御座り候事

此の御座り候事

此の御座り候事

此の御座り候事

此の御座り候事

此の御座り候事



身を名に又清人丸上所寄の  
うり中候の条に在り可也  
あつた  
かゝるにふふの

九月

明和七年寅之月十月十日

酒井石見守殿に宿

山月付

水味  
九月未達之知と心付方不  
行他面より力より  
筆お持ち者も白紙に  
かきつけし  
何れも早急見申付方未熟  
故かきつけし  
達し色紙又は付し

も多し交中付達中一主妙  
内外未分と附供上は分  
場取不中むかす月  
難云字  
之し取不取  
多し無不有の

九月

明和八年卯年十二月晦

一近事供也一自月日  
等投ケル身同也方一  
其之儀もカク一  
且後之者情廣く在達  
かす月一之し取不取

一月切取石籠以し  
對し一音板給敷  
召先達中達以  
一音板給敷其目之

五月内、北陸、人人、抄、一、年、之、由、  
定、一、月、毎、一、日、人、一、外、今、年、慶、三、日、連、日、  
又、古、の、日、一、日、の、あ、り、の、り、に、

一月、切、り、る、龍、下、流、一、系、入、道、才、才、  
一、月、下、流、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、  
中、乃、定、一、日、色、下、流、札、降、日、下、  
系、下、流、一、日、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、

若、し、此、向、一、日、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、  
一、日、向、一、日、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、

十月

素、尔、尔、尔、信、  
水野、要、人

若、し、此、向、一、日、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、  
一、日、向、一、日、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、  
一、日、向、一、日、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、  
一、日、向、一、日、才、才、一、一、日、向、一、日、才、才、

水野、要、人

明和八年卯年十二月晦

近來供与之内及長柄  
木投以多可也  
之系と中一  
流と志場廣石連不中  
中一

安永二癸巳年七月晦

加納遠江守殿

志石連石供与  
振高石  
等閑  
おる  
修者

先人様お杯しりるに隣るおんし  
有りて供事様き世傳本をも幅  
取ら供事り及自かり相与  
先紀も有りし如所品後本  
向度と急交中付のさし  
そし場元不中振引縮徒  
し者有る句降先人様兼其外  
供事り行列しるも大概五六  
尺程家七間と云並並と振

安永三  
七月

安永三甲午年七月十九日

加納遠江守殿様

山月付

江戸中流遊、一巻供出、水勢小  
不列、縦玉持、一巻供出、  
湯、一巻、二巻供出、二本、  
之、本、水、一巻、一巻、  
一巻、不列、一巻

右、江戸先年、一巻、  
未、遊、水、一巻、一巻、  
一巻、一巻、一巻、  
一巻、一巻、一巻、

右、江戸先年、一巻、  
未、遊、水、一巻、一巻、  
一巻、一巻、一巻、  
一巻、一巻、一巻、

安永三甲午年十二月七日

松平太山、松平殿、  
大目付、

法、大、名、字、物、一、  
細、付、一、巻、水、  
一、巻、水、一、巻、  
一、巻、水、一、巻、







右ノ所ニテハ水ノ少クテ以テ農夫ノ田  
腰細代ニテテカ物カ草ニテ鞍履  
其用シテテカ物持テテテテテ  
不カカカカ

一 水ノ

テテテテテテテテテテ

安永四年四月十一日

安永水野村おと殿様様

此同封紙

大ノ水ノ少クテ以テ農夫ノ田  
供テテテテテテテテテテ  
先ノ水ノ少クテ以テ農夫ノ田  
向供テテテテテテテテテテ  
此類ノ水ノ少クテ以テ農夫ノ田





下より下へ格下へ連下  
人教し先

一 四角及指方石以上并出持し婦子  
侍立人ノ系履先立人ノ杖箱持  
沙人立人ノ人ノ向立人ノ向立人ノ向立

女系人

一 寺方石以上ノ侍式者人式人  
分限ノ意一 一月を以て列

いさあ履先一人ノ杖箱持立人六人  
ノ人ノ向立人ノ向立人ノ向立人

下等ノ物上石連下人教し先

一 四角及指方石以上并出持し婦子  
侍立人

一 寺方石以上ノ婦子杖箱持立人  
向立人ノ向立人ノ向立人ノ向立人

杖箱持立人杖箱持立人杖箱持立人  
杖箱持立人杖箱持立人杖箱持立人

一 是日金持寺人

一 法喜以法相以布衣以上一以役

人并中奥以中住元三子石以上一

高左侍少人 高左侍少人 狭路

持寺人 高左侍少人 金持寺人

一 三ノ十石以上一 高左侍以上一

一 以役人 中奥以高左侍 高左侍

寺人 高左侍 高左侍 狭路持寺人

一 高左侍 高左侍 金持寺人 狭路

持寺人 高左侍 高左侍 高左侍

寺人 金持寺人

一 御城 高左侍 高左侍 狭路中

以門外 高左侍

但高左侍人 高左侍 高左侍

高左侍

一 江戸中住送 高左侍 高左侍

高左侍 高左侍 高左侍

勝之勝之二勝借陸二本丸  
之在中之入之寸惠脚又者未  
惟一列之

一 九千石分女石込 傳七人丸

八人

一 四千石分三石込 日六人丸

七人

一 式石分石込 日三人丸

五人

一 九百石分三百石込 日一人丸

三人

一 式百石 日一人丸

一人

一 女石分石込 押是惟一人

一 三千石分二千石込 押是惟一人

一 二千石分一千石込 押是惟一人

一 但書以并其又其者、之石込

押是一人



一 順孝長柄奉了りて用り

一 陪位に在りて奉了りて供へ去りて人給

准し 海小執力不りて付り

一 其の由急交り不りて奉了りて熱脚供へ者

一 風信同三不中少所供へ法道中付

一 居るも少少付附無りて一際不

一 不供候了り付り

一 一傳抄内外不達了供了り未し候先

一 上斗に候修了如に上斗候不候

一 此の由前候候候修了り候候候候候

一 大に色宝曆八年相違り海築了

一 候候候候候

二月

安永五丙申年二月十日

松平右近少監殿

酒井石見守殿

大同付

以同付

法大名往還之旨 佐竹多吉連の  
由より力に 佐竹之病に  
由りて 佐竹之病に  
由りて 佐竹之病に

先供覚龍胎丸

一拾万人以上 十三四人限

旧引

一五万石以上 十七八人限

旧引

一拾万石以上 二十人限

有る内より 五分限 五石連

紙玉持より 九石限 加る龍胎丸

十二十四五人 十石以上 五石連

己斗 亦達て 五石以上 五石連

備後 亦并 五石以上 五石連

一石以上 大振 五石以上 五石連

一石以上 振 五石以上 五石連



一 位了る有言事以事もあらんを以て後  
何事とも不用候

一 有る外依也日規力不足迄者准一  
小規力不足達往來一際之不安成

一 規力不足中付し  
一 一 一 塔英以曲臨内とよみ

一 之より有る及混雜多かり候情一  
之より有る及混雜多かり候情一

一 之より有る及混雜多かり候情一  
之より有る及混雜多かり候情一

之月

有る及混雜多かり候情一

安永五甲申年三月十日

松平次郎忠房殿

河井右衛門忠房殿

大目付

少目付

法大名を扱ふ月折 縁取也  
柄年有持の如くも有る月  
折し 弟を玉持 漏法 以て家  
之度流 越前 赤前 之 有持来  
以て斗 以て身 之 有持 下 中 以  
縦前 之 有持 来 以て 以て 下  
之 中 向後 之 月 以て 以て 折 縁取  
也 柄年 之 如く 之 月 有 之 之 以  
且又 之 如く 日 之 度 也 前 之 以て 縁取  
之 月 以て 之 向後 之 月 以て 前 之 以て  
是 其 座 之 月 以て 之 以て 以て  
之 以て 之 有持 以て 以て 以て 縁取  
之 月 以て 之 大 同 以て 之 以て 以て  
之 月 以て 之 以て 以て 以て 以て  
之 以て 之 有持 以て 以て 以て 以て  
之 以て 之 有持 以て 以て 以て 以て

安永八己亥年六月十日

此間付也

想古の事は昔より 風俗異風は  
今も先人の様にお持ちする名を左不夫  
右連流へ去るも口々遠くは其の想  
辨行列は名大概五六人祀り  
口々に伝へて是れ也 且於此曲臨外は  
何代も其の志は通じし事連流は其の代  
より者少人におまに其の事も其の事  
に先人を去るも其の事通じて不文に  
くも其の様にお持ちする名を左不夫  
右連流へ去るも口々遠くは其の想  
辨行列は名大概五六人祀り  
口々に伝へて是れ也 且於此曲臨外は  
何代も其の志は通じし事連流は其の代  
より者少人におまに其の事も其の事  
に先人を去るも其の事通じて不文に

才了者 魚達

六日

天明八戊申年三月十日

松平越中守殿 御清

大目付下

一 前之 位 出 仕 立 場 度 存

通奉侍士 足輕 中 右 陸 右 中 右 戸

抱 一 之 列 之 如 之 列 之 如 之

以 執 之 亦 同 之 如 之 知 行 老 杯 之 達 之

面 之 者 之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

未 之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

以 之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

不 之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

分るまゝに付通す所付し事  
為らも先中右年事申し  
不及中遠不法之類之書何小  
徳一月書之所書行上書出

但此支能者之向之書  
之能より所書行上事  
事

一方は公人町方おのり  
花は徳知りしりて先方おのり  
に許出の所書之のいふ事  
方おのり之れは事来りて  
及速惑し何れ之書人  
中後宿の書順之書引れ  
文之書之書有し之れは  
書人上眼の中後之書  
おのり之れは所書行上  
中後之書之書之書之書



入しや法以多し一以志九はも  
所幸行上急之反中付、  
人しやし書面之色あはれ  
招て向  
名し如向しは急し下達し

天明之癸卯年十二月廿八日

松平因防少殿は後

三幸行

大目付 上

少目付

信早し何しきし 招て信  
高しあ達し知あむを新し  
お聞し詳定所し前并懸掛  
て用ししも信早し何し  
少く別る加る就し志不他法  
し美者し由お聞しは信早し



十二月

寛政元巳酉年閏六月十日

松平伊豆守殿少後

御手紙に承り申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

向度接申上り候事  
御座候事  
御座候事

様回西丸大子之祈下る事  
御座候事  
御座候事

雨天候事  
御座候事  
御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

中 子中 孫 吉 朗 山 也 不 可 付  
也

有 一 色 之 多 保 十 六 亥 年 未 達 日  
亦 有 一 色 之 多 保 十 六 亥 年 未 達 日  
一 段 上  
名 一 色 之 多 保 十 六 亥 年 未 達 日

六 月

寛政三辛丑亥年十一月十日

中 一 口 穴 院 一 孫 吉 朗 山 也 不 可 付  
是 迄 亦 行 一 孫 吉 朗 山 也 不 可 付  
中 一 口 穴 院 一 孫 吉 朗 山 也 不 可 付  
少 何 亦 不 及 一 孫 吉 朗 山 也 不 可 付  
亦 何 亦 不 及 一 孫 吉 朗 山 也 不 可 付  
姓 名 承 紀 一 孫 吉 朗 山 也 不 可 付  
何 亦 不 及 一 孫 吉 朗 山 也 不 可 付

有るは所存の依り以達しん望  
十月 平賀式部少輔

有るは所存の依り以達しん望  
以名に潤之上達書に部を之  
に之部中の上徳以に部中お除  
了也

寛政三年十一月十七日

田沼龍助

名代

依り以達しん望の事  
有るは所存の依り以達しん望  
依り以達しん望の事  
依り以達しん望の事  
依り以達しん望の事

憲教類典

神ノ始末ハ得遠ニ事一ニ以候  
下一ノ力色以少法之

右ノ去々ハ十四日松平伊豆守殿於  
所建以日人新修殿ニ去目付  
松浦越前守亦裁田

二頁

十二月十七日

右ノ事 後出 以書付

認入付部中 亦除了

奉文

南

憲教類典

三三  
八上

三三  
八上  
奉公人

三三  
八上  
古  
14

寛政御覽

奉公人

三美上

慶長三戊戌年三月七日

一 辻切盜賊等祭興分高札

控

一 辻切盜賊之儀三付而諸奉公人侍廿五人組下人は十人組ニ連判をしろし右悪逆仕へりたる旨請を申へり事

一 侍五人下り十人より内の者は有次第の組たるへり事

一 右組にきりれり者は指をさり追放すへり事  
一 右之組中悪逆仕事の組之中より申上り者かの



惡黨加成就組中不可有異儀事

一組之外より申上りし悪徒一人に付金子貳枚

宛之儀惡黨之主人より訴入、褒美として可遣

之事

一令度御掟に被書立侍十人自今以後他之家中

に可不出主人同心之上は格別たしへ事

一咎人成敗事夜中隈に不可誅戮其所奉行に相断

申付了し至時すまひ不及了簡内より即刻可相

届事

右條々堅被仰出所也仍如件

右條々書付難能分所出有之由に付得て取調之上

高札之部へも可認入

慶長十五庚戌年四月二日

定

一侍之事ハ不及沙汰中間小者に至迄一季居之者

と一切不可置事

附奉公望之者一季と相定出す者は可為曲

事

一新来之者は存分次第堪忍すし但其年之切米

を取に於小翌年之長迄役儀を勤其上暇を可乞

事

一御善請 御陣 御上洛之御供又は御使之御沙  
汰在之時暇を乞之儀可為曲事之首被 仰出者  
存其趣不可出事

附關中諸奉公人之分六尺一圓不可抱置若  
相背輩あらは為過料金子毫兩可出事

右條々堅可相守者也

慶長十五戌年四月二日

元和五己未年二月十日

條々定

一季居一切抱置置へかりさる事

附一季居之請人に立へからす但堪忍次第  
と有之者不苦事

一人賣買一切停止たり差濫之輩あらは賣買指  
之上被賣り者はその身の心たまかすし并引  
賣に付てはうり主は成敗うらる者本主可  
返事

一年季之事三ヶ年を限りし三年を過は双方可為  
曲事

一於町中自然火事出来之時奉公人下々に至迄一  
切不可出合之事

- 一 手負たるものを隠置へかりさる事
- 一 主なし宿うりの事請人之手形を町奉行に差上  
西人之裏判を以宿を可借事
- 一 辻立の立すへかりさる事
- 一 ほうかりけその外何にてもふかく顔をつくみ  
かくす族ありは見合に成敗たすへ事
- 一 大付に作事同書事最寄被 仰出候如御書付堅  
停止たるへ事

右可相守此旨者也

元和五年二月十日

右御書付之内うたわわしとて所も有之に付  
得と調之上高札之部人と認入へく

元和五年二月十日

條々覺

- 一 不暇乞して欠落仕れもの宿當主人へ相届可有  
返但 御上洛御普請之時は堪忍仕り罷  
歸り而可召返併由事いふし欠落仕者之儀は格  
別たる條其趣可令言上又は在々所々に引籠罷  
在輩は其所之地頭代官として可相改事
- 一 欠落者之請人之事右申定候切米程請人之かた  
より主人は可也事

一御陣御上洛御普請之御欠落いたる者別而  
曲事なり 依之請人より尋出し主人の方へ相  
渡すへしもし不叶におゐては請人の方より過料  
として右約束之切米一倍主人のかたへ出すへ  
し過錢不出とのをば即日籠舎たるへし事  
一欠落之者に他所にて取替出し人の損たるへ  
し請人なくして人を抱之儀越度たるの間如此  
也但請人左之者を指置におゐては請人の方  
彼の出しに取替程の前後之主人へ可出之性  
たゞらざる者之請人に立し事依為曲事也  
一御極々御法度御請人各々にも御極々御請人可  
為御成敗之事

右條々可相守此旨者也

元和五年二月十日

右御書付高札之部へも可認入

元和五年己未年十二月廿二日

條々

- 一人をかどわかし賣以者死罪之事
- 一人を買取夫より先へ賣以者小百日之牢舎其上

過料録其分限越て可申掛之若不出者に於て  
は死罪事

一人を賣買御制禁之上は或譜代或家子たりといふ  
其賣のあり程賣人買人從双方可出之則う  
らぬものには取はなす可仕其身覺悟事

一かとおかされぬ者は其本主へ返すへし若主人  
たすものは是も其身存分次第之事

一人高賣宿之儀久敷仕り者は可被行死罪但一夜  
之宿は糾明之上依其過可為曲事事

一人之賣買口入人之儀かとおか賣小時之口入  
は可為死罪亦可為過料事

一長年奉御停止之上自然裸之輩は其人之分限に  
隨而双方可出過料事

一暇を不乞して欠落仕り者女當主人へ相度可申  
返之但御陣御上洛御普請之時は令堪忍罷

歸り以上は可召返之係致曲事令欠落者為格別  
之條其旨を主人に相断若無承引者奉行所迄

可申度又は在々所々引込在之者をして其所之  
地頭代官へ相度可召返事

一欠落之者之請人は右申定の切米之一倍請人方  
主主人に可出之但不出ぬ於ては可為牢舎其上

は主人次第之事

一御陣 御上洛御普濟之御令欠落者別る曲事なり然上は請人より尋出し主人の方へ可相渡之若於不叶者請人々為過科右約束之切米一倍主人の方へ可出之於不出は率全之上主人可相斗之事

一欠落者に他所より取替金出におろしては其仁之損たし無請人して人抱し事為越度之上如此也但請人有之程は請人の方を取替程の先後之主人は可出之事

一公儀御去後相請人可相渡之於不叶は請人可為死罪事

右條々堅可相守者也仍如件

元和五年十二月廿二日

寛永十回丁丑年五月

覺

人之賣買御法度之札元和五年極月廿六日大橋立申し其札より以前人賣買出入有之其是は無之其後之出入を被仰出御法度のとくたへし事

寛永十四丑年五月日

寛永十六己卯年二月廿三日

覺

中間小者草履取給分之事金高或兩或分又或兩  
それ下は相對次第ありし但旧をなすにお  
るては主人之心に可任事

二月廿三日

慶安四年卯年二月廿三日

中間小者草履取給分之事金高或兩或分又或兩  
それ下は相對次第ありし但旧をなすにお  
るては主人之心に可任事

二月廿三日

明暦三丁酉年正月廿九日

火事之節覺

一季之輩如例年出替之節暇を乞はれおありは  
今度火事に付先々、而可令迷惑の間に給分扶持  
方食物等不足、而去其儘堪忍すへさと申はは  
け可差置勿論暇を乞はれ、可出之由最寄相觸

此一とて當年は一季一切暇を不可出去年之給  
金扶持ニ前之請人を以可召置若別之請人  
可立替と申は可、可任其意但主人相對ニ  
暇を出入候と不苦以上

正月廿九日

明曆三丁酉年十二月

一季居之奉公人當年之請人を立給分同前ニ  
來年と可召仕之具者は勿論請人及異儀は可為  
曲事并礼と不持ルと申居人足に不可出自然に  
都請と申候事

酉十二月

奉行

寛文五乙巳年十月

人請ニ立候者造成人主并下請人を撰手形取置  
請ニ立可申候若造成人主下請人を不取請立ニ  
此上の有之ル可為曲事

寛文八戊申年十二月廿八日

覺

一季居之屋敷小者中間倒年二月二日雖為出格



先年酉年分今年之請人手形ニ御旗本之分は  
三月五日迄可差置之若及異儀輩於在之日請人  
迄可為曲事者也

申十二月廿八日

寛文十庚戌年二月

去年相觸り通一季居之奉公人許三月五日切之  
約束ニ相定差置可申以來被來被 仰出無之  
内比年迄右之通ニ相心得可申事

寛文十壬子年二月  
一季居之若當期者中間出替之事御旗本方同前

向後於諸國ニ限三月五日之旨毫万石以上之  
留守居へ今日於 殿中大目付申申候之

寛文十二壬子年十二月

下ニ出替之儀跡三月五日切たると但國ニ知  
行所之者も相對次第のりニ事も不苦諸大名家  
來たりと云共江戸大坂其外他國ニ抱りとの  
と三月五日迄可限者也

寛文八戊申年十一月廿六日

一今度御老中被仰渡り以一季居之との之儀何と

願之通達 上聞由得也來年先三月五日切一  
出替之儀被 仰付の旨去在々之七の之痛其外  
障りにも罷成の具跡々之通可被 仰付の右之  
趣而々組申へ七可申候由より此書付御接可  
被成の間此旨可被仰觸の以上  
一季岳之差壹小若中間例年二月二日出代り左  
りといへ吉先來酉年々今年之請人手形に御  
強本之公々三月五日近可差置の差及異儀族於  
有之々其請人迄可為申事申の也

申十一月廿六日

延宝三乙卯年二月

覺

去年國々洪水に付諸民乃困窮之間當卯年は長  
年季之者亦ハ譜代差置の共相對次第不苦之条  
存其旨可抱置也

卯二月

天和三癸亥年二月三日

覺

當四月拾日先御法事に付被差遣面々一季居之  
步行差壹小若中間に至迄去年之請人々以切米

負數去年之通じて可召置之若及違儀ハ其頭  
々支配方へ可達之又ものも可為因前事

亥二月三日

元禄十一戊寅年十二月

奉公人之年季前々方十年を限りハ処向後々年  
季之限り無之譜代ニ差置召仕ハ其可為相對次  
第ハ同其旨可存ハ以上  
十二月

元禄十二卯年三月

人膏買之儀彌堅禁止之召仕之下人男女共々年  
季十六年を限りとしハ其向後々年季之限り無之譜  
代ニ召抱ハ者可為相對次第之間可存其旨者也  
仍如件

元禄十二卯年三月

奉行

元禄十二己卯年三月

一出替之奉公人ハ一ハ浪人ニ多差置申向敷ハ  
來晦日前ニ無沖断早々有付可申出延々仕ハハ  
ハ可為不存ハ事

一前々相觸の處奉公人之請之出、其主人之屋敷之内、下請人取置新訟申出のり、取上申問敷事

一奉公人之上請人下請人、主其男、以下之者并女之分一切請人、被申問敷の出入有之罷出のり、若右西様之請人取のり、新訟上申問敷の事

一前々奉公人相請、立のり、其空舎申付の此有相心得殊向後立申問敷の事

一奉公人請、立有付置其奉公人下請人、主申合為申取或欠落、其手前以奉公人請相極主人方、不罷越請人、其置外有付為致欠落古主へ取替金と不相立、永々抱置の請人有之、此等之儀仕の段、不存以自今以後之儀堅仕問敷の物、而奉公人之出入有之、不捨置急度得可明事

一前々相觸の通町中、出居家差置のり、遣請を取可差置の店、其の出居家差置のり、家主へ相断家之心次第可仕の家主へ無断出居衆へ置のり、空舎可申付の事

三月

右於井上大和守殿宅被仰渡の

元禄十三庚辰年二月廿四日

當四月於日光山御法事之付

被指遣面々徒若

黨十者中間至迄一季居之奉公人去年之請人  
并去年却未之自數を以當辰年七可右置以萬一  
及異儀は其頭々又は支配之方へ可告之り又若  
も可右置以前以上

二月

宝永三丙戌年正月十九日

當年以時替年道進之給猶更前請人並  
可差置以若別々請人を可立替と申りし可任  
其意の尤相對する暇を申し可我け可為勝手次  
第以

戊正月

宝永三丙戌年正月十九日

覺

奉公人出替之節近年人少之可不自由之由相聞  
以間知行有之面々は知行所より夫を呼給ふ等  
相應為取召仕可被申以但田畑持以もの之農業

其外障無之其所之痛ニ不成様ニ了簡可有之ハ  
申付様之趣ニ在之のろろ其にも可成事ハ  
向百姓も右之趣可相守ハ均也

戊子月

宝永元甲申年四月廿六日

覺

當年七所之普請等有之付

奉公人差支ハ義

も可有之ハ向一季居之者當自之暇は出ハ事無  
用ハ去年之給分ニ在之以前以後請人可差置ハ若  
勤之請暇ハ出ハ義也申付ハ其意ハ以上

元禄十七子年三月

宝永五戊子年二月十九日

覺

一奉公人出替之前近年人すくたろ不自由之中  
相向ハ向知行有之面々は知行所より人夫を呼  
給分等相應ニとらせ召仕可申ハ但田畑持ハ古  
の杯農業其外障無之其所之ハ互ハ不相成様  
了簡可有之ハ申付様之趣ニ在之のろろ

はた可成事ニ以向百姓七右之趣可相字以上  
子二月

宝永五戌子年二月十九日

覺

當年比一季居之者直ニ差置度ト存レトの共暇  
七出レハ儀無用ニ以去年之通ニ給分ニ前之  
請人ヲ以可差置ハ差別之請人ヲ可立替ト申レ  
リ可任其意ハ尤相對ニ可暇ヲ出レ儀ヲ可為  
勝手次第以上

正徳元年卯年二月

去八月町中人宿共組合ニ申付レ節親類亦々同  
國之好身ニテ一人二人ヲ請判リテレ分ハ人  
宿之外ナリ一々之旨相觸ル所近キ頃欠落トの  
盡所帳面ニ付レ分々組合請人之寄子々無之多  
分組合之外寄子々數多致欠落ハ畢竟親類同  
國ト申ナレ組合ニ離レ致人宿レもの有之様ニ  
相聞不存ハ組合之外者人請ニ立レ儀一向相止  
レハ差支レ事可有之哉ト令用捨右之通相觸  
ル処據ニ請ニ立レ段不存ニ以向後々實親類カ  
又ハ同國之者ニテ外ニ近付無之者遠國者兼ハ

類人與人を請ふ立可申候寄子五人以上有之  
もの七終親類同國ニある人宿ニある間組合  
入可申候右之通町々并右主月行事立合相改寄  
子人別書付未晦日限ニ町年寄迄可差出候  
右之趣若相背もの於右之他家主月行事迄急度  
可申付旨町中不殊可相觸候以上

正徳元辛卯年三月

奉公人請取小儀人宿共吟味強候付在々より奉  
公に奉候者共致難義不在付在可江歸候族有之  
仕候事

一前々申渡候通女奉公人之儀を組合不限請人  
何方ニあるも勝手次第致請判奉公人不差支様可  
仕候事

正徳元辛卯年三月

奉公人之上請人下請人々五世ニ拾七歳以下之  
もの女之分一切請ニ取申間鋪候右兩様之請人  
ニ出入右之証出候共取上申尚敷事

享保四己亥年八月十六日



覺

諸奉公人卜請人欠落亦不辱有之御仕置に成  
りり自今家主致裁判に不及主人卜奉公人  
相對に可仕に此外奉公人給金借金等之儀に付  
請人又り家主五人組杯を屋敷へ留置流方申付  
り事堅無之筈に請人滞有之七其主人の奉  
行所は断次弟不持有之りり吟味之上無急度可  
申付に

右之趣町中相觸に此外に七町奉行に申渡に  
呂有之に尚前合座儀にりり町奉行に可相相

尋らり上  
亥八月

享保四己亥年八月廿一日

一諸奉公人欠落之儀主人断次弟給金流方之儀請人へ  
急度可申付り事

但給金流方請人へ申付に以後若滞埒明不申  
りり請人身代かきり可申付り事

一取逃引負等之欠落者主人断次弟請人日三十日  
切之尋申付於不尋出も過料可申付に若及數度  
に七曲事に可申付に欠落者尋出にりり取逃物  
賣拂に共買主も為戻可申に金子杯遣捨に事分

明<sup>二</sup>の<sup>一</sup>す<sup>レ</sup>たり<sup>レ</sup>に可致<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>尤<sup>レ</sup>請人過料<sup>レ</sup>と差免<sup>レ</sup>  
給<sup>レ</sup>金斗<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>方可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>事

但<sup>レ</sup>請人奉公<sup>レ</sup>人之下<sup>レ</sup>請人取置<sup>レ</sup>らる<sup>レ</sup>請人相并<sup>レ</sup>  
以<sup>レ</sup>金子下清<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>掛<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>度旨願出<sup>レ</sup>共相對<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
格別御役<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>方ハ申<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>間敷<sup>レ</sup>事

一惣<sup>レ</sup>取逃引<sup>レ</sup>肩<sup>レ</sup>之儀若<sup>レ</sup>請人兼<sup>レ</sup>て存知<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>る様子<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>  
以<sup>レ</sup>急度<sup>レ</sup>遂<sup>レ</sup>金儀<sup>レ</sup>其上<sup>レ</sup>落着<sup>レ</sup>次第<sup>レ</sup>請人御仕置<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>  
付<sup>レ</sup>事

一町人之召仕<sup>レ</sup>欠落<sup>レ</sup>取逃<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>肩<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>之儀<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>之通<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>  
心得<sup>レ</sup>事

一此方<sup>レ</sup>預<sup>レ</sup>置<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>品<sup>レ</sup>御役<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
可<sup>レ</sup>濟<sup>レ</sup>金<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>料<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>事

但<sup>レ</sup>家主<sup>レ</sup>欠落<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>店<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>掛<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>度旨願出<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
共相對<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>格別御役<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>間敷<sup>レ</sup>事

一欠落<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>主人<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>預<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>  
召<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>願<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>主人<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>呼<sup>レ</sup>寄<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>數<sup>レ</sup>  
度<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>主人<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>奉行<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>断<sup>レ</sup>次<sup>レ</sup>  
第<sup>レ</sup>吟<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>事

一奉公<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>主人<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>断<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>  
主<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>異<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>願<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>借<sup>レ</sup>金<sup>レ</sup>筋<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>  
は<sup>レ</sup>店<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>願<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>間<sup>レ</sup>敷<sup>レ</sup>事

一請人欠落以後主人方分断有之ものと取上申問  
敷事

一取逃引負欠落者之請人自然欠落いれしりり  
主人見合に本人召連可来り本人を尋出指出に  
り取逃場七前條に有之に通申付右欠落との  
當宿有之店請人取置りり不慥成者之請に立  
差置り品々其店請人に過料可申付り差又當宿  
之もの店請人と取置不申指置りり尤當宿へ  
過料可申付り右取逃引負致しり若勿論御仕置  
可申付事

一諸儀傳限り不し可申付り證文加判人檢有之と  
尤當人加判西人方分海方可申付事

但當人加判人とも致欠落りり右出入を  
捨りたりへし右之出入を畢竟相對之儀に  
以向御役所にて海方申付り節當人ト加判  
人斗へ證文申付家主加判に不及り事

一門前拂之儀に今迄之通可申付り右門前拂に成  
り當人重る之任所見帯元家主出入相掛りりり  
ハ尤當人身代せかきりり可申付り當家主へは  
金子申付向敷り事

一諸人欠落又は不仕有之御仕置成り共自今家主

致裁判の不及主人は奉公人相對に可仕此  
外奉公人之給金借金等之儀に付請人又は家主  
五人組杯を屋敷方へ留置所方申付の事堅無用  
之答に請人滞於有之を其主人の滞役所へ断  
次第不埒有之に吟味之上急度可申の事  
一奉公人出入并諸借金買掛等之儀に本人滞れば  
付家主又七店請人は近來段々申付の得共右之  
條之通向後相極の事  
右之趣急度相心得可申旨申中は可觸知者也

亥八月

享保四乙亥年八月

五嶋平戸大村邊他國之七の抱の時奉公人國  
許に相違抱の様去る頃被仰出此おら  
奉公人々本國知承る者之儀に問本國は糾  
に不及大坂町奉行へ別紙に有之通申渡の條被  
得其意證文す出可申に已上

八月

大坂町奉行に申渡の書付

一おら奉公人西國筋へ遣はし時は其國に藏屋敷  
留守居之者證文差添口入之七の奉公人々召連  
可罷出其上より役人伴之奉公人跡奉公望の哉

否之儀承届帳へ記置可申事

一 おこし奉公人大坂地廻り何方にも奉公に出  
候止候にても及間敷の人を扱候もの之方にも  
奉公人之出所敷吟味の上におこし奉公人ト存  
候る召抱候とも勝手次第之儀に但大坂  
御城中には奉公人出寸間敷旨口入之者へ急度  
申付置候事

右西通之書付松浦肥前守大村伊勢守五嶋近江守  
五嶋兵部江達

享保五庚子年三月

藩方相定候通奉公人之請に急度可申候事  
藩立可申候者下請無之候に急度可申候事

享保七壬寅年三月十六日

酒狂の左一刀脇差なる人に疵附候もの之  
事

一 其主人は預て冒疵被附候もの平癒迄苟療治代  
為出可申候療治代難出ものを刀脇指取上酒狂  
人主人は可相渡事

但取上の刀脇差を疵被附候者へせしめ可  
申事

一 右療治代難之多少によらず中小姓種にあり

銀二枚徒士は金壹兩三錢中間ハ銀壹枚を指出  
可申事

酒狂ニ人ヲ打擲シテ人者之事

一右同断但刀脇指取上ニ不及身上限り諸道具取  
上打擲に逢ル者へこりせ可申事

一但右酒狂者之儀主人は断ハ節欠落申立  
ル共主人方を罷出三日之内ニ有ルハ欠  
落ニ相立申箇敷事

右二ヶ條町人々別牢舎申付之次第同断但主人無  
之者ハ宿所ハ可帰遣ハ事

一過軒出寸也檢失之者へより世輕ニ身立之者ハ  
身上限り可申付ハ事

享保十一丙午年二月十五日  
諸奉公人請願入口致シル七の出未其事ハ付不  
宜義共有之ハ間自今入口停止ニ申付ル此以後  
相背内證に乙致入口者有之後日ニ相知ルハ  
ハ急度可申付之尤日雇請願之儀ハ別段之事ニ  
ハ同構無之ハ

右之趣所中は可觸知也

午二月

享保十一丙午年四月十八日

能登守教御役

御目付也

武士方之家来諸奉公人之人主下請之之者有  
之り奉公人出入之節奉行所は呼出し以上  
請人同前之出入金可申付し向主人は断有之次  
右家来奉行所は無滞可被差出也

右之趣向は可被相違以上  
午四月十八日

享保十一丙午年四月

武士方之家来諸奉公人之人主下請之之者有  
有之り奉公人出入之節奉行所は呼出し以上  
上請人同前に出入金可申付し向主人は断有之次  
右家来奉行所は無滞可被差出也  
右之趣向は可被相違以上

享保十五庚戌年二月五日

近年八木下直は此諸奉公人給金之前方之通

無替儀高直、此間給金引下ケル様旧冬所觸有  
之、奉公人召抱ル、右之趣相心得ル様、向  
コト可被相違ル以上

戌二月

享保十五庚戌年二月十日

覺

近來諸奉公人取逃欠宿多畢竟請人共不持之仕  
方ニ付此度吟味之上人宿感而人ニ相定メ組合  
申付給金之儀、引下ケル積リ所奉行所ニ申  
付ル事

一右之通ニ付奉公人請收之前判元見、年々者へ  
人宿共方ニ馳走ケ間鋪儀一切不致并奉公人  
引越之砌部屋入之振舞等堅相止ル様、人宿共  
へ申付間此段部屋頭共へ五人コヨリて被  
申付事

一人宿之儀町々ニ組合有之、此間其所ニ有可被  
聞合ル事

戌二月

享保十五庚戌年

奉公人宿之儀ニ付所觸



一近來八木假々下直ニハ此諸公人之給金前ニ之  
通高直ニ有之ハ畢竟請人人主宿共之仕方不悖  
ニ奉公人ハ無筋之入用セ相懸ケル故之儀ニ  
而ハ其上取逃欠落字も多有之旁不毎ニ依之  
此度吟味之上人宿組合申付ハ詢其向寄ニ不三  
四拾人ノ組合ハ右之通急度相守可申ル  
一徒若黨之衣類布木綿取交可致着用旨先達ニ即  
觸書出ハ詢其趣相守可申ル然ル上ハ弥旧冬中  
相觸ハ通給金下直ニ可相極ル此外之奉公人ト  
是亦主人ト好有之奉公人之分給金相對次第之

一右之通ニハ得ハ判債之儀も給金ニ應シ引下ケ  
可申ル然ル請状之節馳走ケ間敷儀セ勿論部屋  
入振舞等之儀セ堅相止ル様請人ナリ部屋頭ハ  
可申違ル其外請人方ニ雜用隨分減シ可申ル  
事

一此以後新規寄子之分セ口入慥ニ共其セの之  
出所元宿承存請人入念取可申ル欠落者ニハ此  
ハ元宿ハ相渡双方ハ月番之番所ハ可訴出ル若  
欠落者之請ニ立元宿ハ見付訴出ル付ハ急度可  
申付ル尤此度組合申付ル外致人宿ハ儀堅無用  
可仕ル若組合之件内證ニ致請判ルセの有之

七致吟味組合之者共可申出但親類ハ二人  
三人請に立小者共も人宿共へ申付趣可相守  
ハ此類は格別之儀也故組合之不及ハ保家主  
名至迄座置判形可仕事  
右之趣相心得一組限ニ名主も申合吟味可仕事  
若相背ハハ、請人奉公人モ不及申組合之人宿も  
も迄急度申付可吟味之筋也有之ハハ、名主共迄  
可為越度ハ事  
右之通此度人宿共へ申付ハ問所ハ、不也此趣相  
心得可申也也

享保十八癸丑年三月

奉公人給金出入金ハ海方申付事

一奉公人給金出入之儀前ハ請人ハ斗申付人主  
ハ不申付ハ若請人欠落等致し不罷出節人  
主も申付ハ自今請人人主西人共身躰限可申  
付ハ

一前々主人方ハ請人ハ相無ハ出入金人主ハ相  
掛度旨願出ハ得也人主ハ申付ハ所去亥年御定  
書出ハ以後下請掛リ之儀相對モ格別於御役所  
モ不申付ハ向後前條之通罷成ハ付ハ主人方ハ  
請人方ハ海申ハ給金ハ人主ハ懸下度旨願出ハ

付所、不惟成人之、取置小分、可申付、尤  
武士方奉公、人人主、取置小分、右之通、可申  
付、

元文之戊午年

素人宿と古奉公人請、立、節他人も勿論親類  
たり、十人分多請、立、間敷旨先達、度、相  
觸、如、今、以、不、得、之、族、右、之、近、き、頃、は、別、る、親、類、他  
人之無差別人数多く請、立、以、相、觸、不、屈、至、極  
以、畢竟家主共不吟味故之事、以、向、後、家主共、分  
急度相改、可、申、以、若、此、以、後、十人之外請判、以、了、  
二、申、付、家、主、も、勿、論、別、の、旨、に、立、五、人、組、迄、越、度、可、申、  
付、

右之趣所中可相觸以上

元文五庚申年七月五日

神尾大和守組

大同右左衛門

旧臘十日家来中村佐助請地村秋葉社地、以、御  
鳥見之由偽りあり札其場、立、退、儀、以、付、奉行  
所、方、相、尋、以、如、右、佐、助、儀、不、得、傍、輩、松、江、清、助、儀、暇  
出、以、儀、不、存、其、上、請、人、親、類、書、等、以、取、置、不、申、不、都

合之儀、付奉行所より、佐助尋申付置り、処不尋  
出、且又右尋儀、最初申付り、家来中村嘉平次  
儀、旧臘廿八日、致出奔り、所其節、不心附り、由  
り、當三月、至り、其段相在り、由、不持之、至り、間  
逼塞被、仰付り

藤壺肥後守組

中村 茂助

茂助 悴

中村 弥十郎

旧臘十日、弥十郎家来、里田之右衛門、岡村内匠に  
詳儀、留置、臘九日、臘表出、候、申付り、得、世請人、住、所  
も、不存、其上、不束之儀、家来之者、申付り、奉行所、分  
右、之、右衛門、尋之儀、申付置り、処、不尋出、右家来  
不束之儀、申儀、畢竟、弥十郎申付り、請り、申儀、  
儀之様、相、同、旁、不持之、至り、茂助儀、遠慮被、  
仰付り、弥十郎儀、逼塞之格、可、罷在、旨、被、  
仰付り、  
右之趣、為心得、組支配有之、面、寄、可、被、相違

七月

寛保三癸亥年十月廿六日

伊豫守殿御後

近年武士屋敷ニ輕き奉公人之部屋子と申傍輩  
々々無之者々々差置其内には外屋敷取逃欠格い  
たしもの又以奉行所分尋之者も有之右躰之  
者部屋々々罷在轉美等も致し旨相聞の間而後  
武士方上屋敷下屋敷とも部屋々々遂吟味不召抱  
ふのは一切差置申問敷

一近來面躰を隠し頭巾を振途中にさかふり  
者數多有之奉行所分尋ものゝ絲數の間前  
有建前在頭巾角頭巾之外一切の事問敷

右之通可被相觸

亥十月

宝曆十二壬午年七月十日

松平権津守殿御後

御目付

武家方陸尺其外手廻り仲間ごと下果下馬又仕  
老中其外門前ニ法外之儀有之段相聞不存  
猥ニ無之様前ニ仕度ニ申渡り得共近來又  
ニ相成陸尺其外手廻り中間共供先又仕自分ニ

る罷出の節も往還に不礼かきりの儀有之趣  
相向不存の右躰之儀無之様寄子共へ急度可申  
付の若又人宿共申付の事も寄子共不相用躰に  
見請の付、其主人の之役人は人宿共不急度可  
申立の勿論其主人の不急度申付置の儀も得共  
人宿共も可申立の且又近自徒足輕等別り風  
俗異風二取扱の者も多有之段相向の銘に寄子  
共へ急度申の異風之儀為致問敷の惣も徒足輕  
共にも限寄子共異風之もの有之の付、相亂其  
人宿共の急度答可申付の

七月  
此書而之通相心得の極寄子可被達  
七月

宝曆八年寅年十月十一日

小出信濃守殿御渡

御自付

上野増上寺山内其外武家方家来の事無之部全  
子之類、而若無當者入込居の儀も有之手掛  
も有之の付、盜賊改組之者若懸改の答に  
右之趣寄子可被達置の

昭和七庚寅年十月廿三日

松平右近將監殿  
酒井石見守殿 御度

御目付也

暇差出山家来勤山内之給金滞之候申立古玉を  
相手取願出山分は奉行所ニ至り不取上事ニハ  
間可被得其意也  
右之趣向一寄一可被相違也

安永三甲午年三月三日

酒井石見守殿御度

御目付也

武士屋鋪小輕奉公人部屋子ト申傍輩ニ至無之  
者ヲ指置也其内ニト外屋敷兩逃欠落致し者  
又は奉行所ノ尋之者ト有之也右躰之七の部屋  
ニト罷在博奕也其方相向也其向後武  
士方屋敷ニ部屋ニ被遊吟味不召抱也一切差  
冒申問敷也

右之趣先年度ニ相觸也其年月ト經ル事故猶又此  
前屋敷ニ部屋ニ致吟味右躰之儀無之様申付也其  
昔様不相成様堅可申付也

三月

右之通可被相觸

安永八己亥年六月

石見守越前守

御自付

徒足輕陸尼手廻了中間共下馬下乘并老中若年  
寄中共外門前或往還等、無礼法外切、  
之儀無之極前之度被仰出、  
相成法外之、  
此以後右躰之儀無之極散敷可被申付、  
若

細用者右之者、  
細用者右之者、  
細用者右之者、

樣可被申付、  
去、  
是又家来、  
上當人、  
儀、  
右之通可被相觸、  
右之通可被相觸、  
右之通可被相觸、



六月

安永四年乙未年十月十九日

相平伊弉守教師後

御目付古

在方之者之請人之取武家奉公之抱置而之致  
欠落給金滞之儀先方地頭之掛合に与不相併  
旨主人に申達に其間八州之外私領之分を寺社  
奉行且遠回奉行支配場之に付、其奉行に取  
斗関人州并関八州外に之を御料所之分は御勘  
定奉行并関八州外御料所兼其長車有記  
八州代官に取斗請人呼出給金取立主人に  
渡り書に

十月

天明八年申年四月廿六日

本多彈正少弼殿御後

御目付古

一前之被仰出に通供立場廣く無之にすり等之  
儀直之極可被致に近未徒士足輕申向陸人等は

戸抱之者別てかきりには有之の趣に相聞に殊に  
知行若杯召連に面々有之の情を申合に論等致  
しんて供先差支に及ひし極に相聞に甚以不将  
之至に江戸抱之者世屋敷役人共申付を不相  
用不法之儀致ししもの有之りけり、輕き分は夫  
も仕置可申付に重き儀にいはる老申差年寄月  
番之町奉行に可被差出に

但頭支配有之而す其頭支配は町奉行に可  
申違に

一人宿奉公人於所方喧嘩只論ひたりしゆけ、先  
に町奉行に可申出に時宜に及ひしに町奉行に  
て承之家来にてを銘に可及迷惑に存り哉其  
當人自無申後宿呼寄暇差出引取證文取置に類  
有之哉に以未其當人自暇申後無之分は家来に  
も取斗に極に町奉行に申後置に右之趣に宿并  
徒士口入之世話に致し若共にも町奉行より急  
度申付に問立人々にて書向之通相心得に様  
可致に

右之趣向に寄に可被違に  
三月

天明八申年十二月廿四日



御目付は

都て町方へ召抱奉公人不将右之暇さし出し又  
は致欠落の節請人へ給金返納之儀申付は  
是難流 出の者有之哉 相聞不存 右之通  
は主人之申付は 不宜の問右躰之儀有之前  
は町奉行へ可申断仕勿論 是得共頭支配右之  
面は聊之儀頭支配は相違は之厭ひ打捨置は  
向て右之哉 相聞右に無餘儀事 是得共左様  
二成行は 是請人共心得違致し 是者も多可  
相成哉一躰取締り 不相成は之問以來は聊之  
儀外共無遠慮 是月番之町奉行へ早速相  
違は様可被致は

十二月

寛政三年亥年十二月十八日

松平伊豆守教由殿

大目付は

都て町方へ召抱奉公人不将右之暇差出  
亦は欠落の節請人へ給金返納之儀申付  
はては彼是難流致は趣不存之儀に付去戌年相  
違は処一同町奉行所は吟味願は手重之儀

相心得り哉今以申出しもの数少くの間に未決  
て右様之儀無之早速奉行所に可申断頭支配  
も能く可申通し且又請人并宿屋共對武家失礼  
之儀或は申付等不相用者は其趣も相届し  
構は可被は

右之通猶又心得違無之様向は可被違は

寛政三年亥年十二月十八日

松平伊豆守教御傍

大目付に

一昨日相違し奉公人給金返納等滞り前之義以  
表所奉行に申出し節に向寄御目付へも其段相  
届尤落着之上も相届し様添書にい左し向は  
可被相違し

年辨不知

一出替之奉公人へも一七牢人にて差置申問敷は  
未晦目前に無油断早に有付可申は延に仕はは  
は可為不届し事

一前も相觸し通奉公人之請に立出し其主人之  
屋敷之内にて下請人取置訴訟申出し付り取置  
申問鋪事

一奉公人之上請人下請人主共に男にて七拾七

才以下之古の并女之分一切請人ニ取申問敷以  
出入有之罷出いと右兩様之請人取付訴  
訟取上申問敷事

一前々奉公人相請ニ之い古のは牢舎申付此旨  
相心得除向後之申問敷事

一奉公人之請ニ之有付置奉公人卜請人人主為申  
合僭申暇取あふは欠落致させ又は奉公人請  
收相極主人方は不罷越年之差置外は有付欠落  
致す也古主へ取替金と不相之永之抱置の請人  
有之此等之儀仕の段石存の自今以後之様  
之異堅仕問敷の物にて奉公人之出入有之は不  
捨置急度可持明の事

一前々相觸の通所中にて出居衆指置の付之  
成請を取可差置の店之者出居最差置の付之家  
主人相断家主心次第可仕の家主へ無断出居衆  
差出はけ牢舎可申付事

三月

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written vertically on the right page of an open book. The characters are somewhat faded and difficult to read precisely, but appear to be in a traditional East Asian script.

